

こどもが遊ぶ空間をデザインする

10/15

講師：山崎 亮 氏
(studio-L代表、京都造形芸術大学教授：コミュニティデザイン)

Schedule 10:00 開講式
10:10 講義
10:55 グループ・ディスカッション
11:15 質疑応答

Staff スクール担当ディレクター 岡本
スクールスタッフ 石黒、山崎、山下、深町

Ceremony 開講の挨拶 出口敦(UDCKセンター長・東京大学教授)

UDCKまちづくりスクールは今年で5年目を迎えるが、その時々ホットな話題をテーマに実施してきている。今期は、来春に柏の葉において小学校が新設されるということもあり、「子どもを育む[まち]づくり」をスクールのメインテーマとした。本スクールは、主に柏の葉でまちづくりに関わる住民等を対象に実施しているが、今期は柏の葉以外の方や学生の参加も多い。本スクールで得た知見を、それぞれの活動や研究に活かしていただければ有り難い。



出口センター長

Lecture

■■■ 議事 ■■■

0. 略歴紹介

- ・本日の演題は「こどもが遊ぶ空間をデザインする」だが、「子ども」に特化した講演は実は珍しい。
- ・デザインとマネジメントの両視点でプロジェクトに関わり、コミュニティと協働することを重視している。
- ・UDCKもそうした視点で活動を推進している拠点だろう。神戸や大阪でも同様のセンターを設立する話があり、検討に参加している。

1. プロジェクト事例：兵庫県立有馬富士公園(パークマネジメント)

- ・兵庫県三田市にある山「有馬富士」に整備された県立公園にどうやって人を呼ぶか…公園の「運営計画」を任せられた。
- ・ディズニーランドと普通の公園の違い…ディズニーランドには「キャスト」が存在する。
⇒地域コミュニティが“キャスト”になれないか? =地域コミュニティに公園内で活動を行ってもらえないか?
- ・地域のサークル団体等にヒアリングを行って状況把握し、20団体が公園内で活動を行うことになった。
⇒限られたメンバーのみで活動していると、活動が硬直化(高齢化)してくる。外で活動を見せると、ファンが増え、活動自体も活発化。
- ・効果：年間来園者の変遷…一般的な公園の傾向とは違い、来園者が年々増加している。

2. プロジェクト事例：あそびの王国(設計と同時並行の活動チームづくり)

- ・段ボール・梱包材をつかって子ども達がどのように遊ぶかワークショップを実施。
⇒子ども達自身がつくる遊び場の寸法を測定し、設計に活かす。
※子どもの遊びを誘発するプレイリーダーとして大学生を10人募って実施した。
- ・地域の寺(欣勝寺)に伝わる民話をもとに、大学生が紙芝居を作成した。
⇒公園のランドマークにも陶板で紙芝居を埋め込み、公園全体のデザインにもストーリーを反映。
- ・公園のランドマーク…子ども自身が自分の位置を(無意識にでも)把握できるようにキッチンデザインにした。

- ・公園のスケール…大人が子どもの行動を見渡す事ができる範囲として、50m四方に遊び場が納まっている。
- ・プレイリーダーの組織化…ワークショップに参加した近隣の大学生等が公園で継続的に活動するためのサークル「ガキクラ」
- ・問題点…予め設計した「遊び」を子ども達がなぞっているだけ?
⇒設計段階では想定していなかった遊び方もみられた。…自分たちが遊ぶ空間を自分たち自身でつくるのが一番楽しい?

3. プロジェクト事例：ユニセフパークプロジェクト(ユニセフ・国土交通省)

- ・子ども達が遊び場を自分たち自身でつくと同時に、国際性(「地球市民」としての価値観)を育む仕掛けがつかれないか?
⇒国際会議に来る大人達の子どものを集め、10日間くらい世界の子供達と里山での公園づくりを行った。
- ・里山が、子ども達の遊び場そのものでもあり、遊び場づくりの材料調達の間にもなっている(木竹の間伐)
- ・子ども達が遊び場を作りながら交流するなか、折に触れて各国の子供達の価値観の相違が言動に現れる。
- ・「こどもが遊ぶ空間」をデザインする → 子どもが「遊ぶ空間をデザインする」

4. プロジェクト事例：生活総研「子どものシアワセをカタチにする」

- ・全国各地の多様な専攻の大学生を集め、子どもの放課後の課題を発見するワークショップを開催した。
- ・造形ワークショップを経て、大学生による「子どものシアワセをカタチにする」提案を12組15案をとりまとめた。
⇒その提案の一つである「母子手帳20年化計画」が実際にプロジェクトとして動き出し、新たに作成された『新・母子手帳』が各地の自治体で採用され始めている。

5. まとめ

- ・子ども達同士が社会性をつくる、社会に参加していく、その切っ掛けとして、子どもが集まる場所をつくるのが大切ではないか。
- ・いま子ども達は、学校と家族以外の“緩い・弱いつながり(weak tide)”が希薄になっているのではないか。
- ・単に遊び場をつくるのではなく、人と人とのつながりをつくっていく。そういう関係づくりを色々なプロジェクトを通じて行いたい。

■■■ グループ・ディスカッション ■■■

- ※参加者(受講生+運営スタッフ・UDCK関係者)が5班に分かれ、山崎先生の講義に対する感想や質問について議論。



グループディスカッションのようす

■■■ 質疑応答 ■■■

【質問】山崎先生のご家庭で子どもを育てる上での信念について

- ⇒「親があっても子は育つ」と思っている。余計な事をしない。
- ⇒子どもとのワークショップでも、プレイリーダーの大学生がやりたい事をやっていれば、子ども達が勝手に興味を持って輪の中に入ってくる。大人が手を差し伸べるのは、その輪の中に入れてあげないようにするだけ。

【質問】「ディズニーランド」と「ドラえもんの原っぱ」について

- ⇒ディズニーランドのような空間は「至れり尽くせり」で参加者が主体的に何も新たに生み出さない、ドラえもん原っぱは土管が管が置いてあるだけだがそこから子ども達のクリエイティビティが生まれる。というモノの形だけの論考は、今の時代ではあまりに純粋すぎる。空き地に子ども達が集まってきた時代と異なり、今の子ども達は個室を与えられ、TVやゲームでも楽しめる。その空間にどのような人が参加し、どのようなプログラムが行われるか、というマネジメントの視点が必要である。

【質問】ファシリテートは誰でもできるか?

- ⇒その人に合ったファシテーションの方法がある。そこに至るには、場数を踏むことで培われる部分もある。

【質問】小さな公園のパークマネジメントは?

- ⇒小さな公園単体だと難しい。複数の公園をつなげてマネジメントしていく事は十分にあり得る。

【質問】問題の乗り越え方(クライアントからの条件をどう克服する?保護者からの要望にどう対応する?など)

- ⇒デザインとは、社会の課題を組み合わせ、それを美しい形で解決する行為である。

【質問】プロジェクト「子どものシアワセをカタチにする」について追加説明してほしい。

- ⇒他の提案には「ベンダークエスト」・「放課後食堂」など。詳細は「生活総研ONLINE」(<http://seikatsusoken.jp/>)を参照。
- ⇒デザインは社会の課題解決のためにあるという原点に立ち戻り、「issue+design」というプロジェクトも毎年行っている。

情報発信の拠点を作って様々な町の人々の活動をつなげていけたら、楽しいなあと思っています。聞きたいことはたくさんありましたが、また次の機会に。ここにきている人との情報交換が嬉しいです。デザインについて少し勉強します。ありがとうございました。

今日の講義を聞かせていただいて、改めてまちづくり、デザインについて考えさせられました。学校ではまちづくりを学ぶ学生と設計を学ぶ学生の考え方が違い、2分化したような感じになっております。しかし、実際これらはデザインという点では一緒で、その「デザイン」という意味の考え方の違いによって生じたのだと分かりました。田舎出身なので、地域のまちづくりに興味を持っています。まちづくりについて、もっと学んでいきたいと思えます。ありがとうございました。

たいへん参考になりました。特に最後にお話いただいた「デザインは社会的な課題を皆が共感するような形で美しく解決する」というお話は、山崎さんのお仕事すべてにあてはまることでもあり、何かをする時に私たちがベースにおいていくべき考え方であるように思いました。

自分が子どもの頃に、今日紹介していただいたパークが近くにあれば良かったなと思いました。地元で沢山の遊具が備えられた公園がありますが、子どもの数はいつも多くありません。今回の講義を聞き、ソフト面の提案の重要性を強く感じたので、ソフトが充実した公園がこれから増えていけばいいと思います。貴重なお話、ありがとうございました。

ハード面だけでなくソフト面のマネジメントも行っている山崎さんのお話は本当に面白かったです。私は今まで主にハード面に関しての勉強をしてきて、ソフト面がなければハード面があっても成り立たないのだと気づいたのは最近なのですが、そんななかでの今回のお話だったので、ずっと心に響きました。山崎亮さんという人がすごく好きになった、そんな時間を過ごせました。ハード面を置いておくだけではない、真の意味でデザインされた空間を作りたいと思いました。

山崎亮さんの講義があるということで興味を持ったのですが、同じ机の方と話す機会があって、新鮮でした。デザインの勉強をしているのですが、設計職の方や、様々な分野の方からいろいろな視点でお話を聞くことができ、刺激を受けました。

今日は素晴らしい公園の設計とチームワーク作り(有馬富士公園)が大切なことを知り、独自のセンスに感動しました。自分の信念をもった子育てにも感動しました。今の時代に合った体験できる空間を作れるか作れないか本当にこれからの子供達の為に考えて行きたいと考えます。今日はありがとうございました。

子供の遊ぶ空間を作る時に、子供・親が安心して遊べる為の工夫を取り入れた遊び場づくりがある事が分かりました。また、小さな身近な公園のマネジメントについて地域の声を集めて自ら公園づくりに関われるしくみができればと思いました。例えば「赤いタコの滑り台に色ぬりするプロジェクト」なんてものがあったらいいのかなと思いました。

子どもが「遊ぶ空間をデザインする」という視点にとっても共感しました。次の世代を担う子どもたち自身が自ら考えて社会へ参加することがとても大切なことだと思うからです。山崎さんの「口出し過ぎない」子どもへの関わり方も大事なスタンスと感じました。社会問題の本質を見極めて美しく解決方法をデザインするというデザインセンスについて自分には不足している部分であると教えられた部分であり、デザインについて学びつつ自分が現在研究している子育て環境についての課題に活かして行きたいと思えました。本日はありがとうございました。

非常に興味深く聞かせて頂きました。私も住宅屋として街づくりに携わっていますが、「コミュニティ形成」という名をうっても、やはりハードをつくるにとどまっていたということを実際の講義で気づかされた気がします。もっと住民、人に入り込んでソフト面の形成に協力したいと思えます。本日はありがとうございました。

会社員をしながら、父親の子育て支援のNPOファザーリング・ジャパンに所属し、さまざまな角度から子育て支援にかかわっています。また、小学校のPTA会長をしております。日頃から地域・学校への父親の積極的なかわりをどうしたら増やせるかを課題だと思っています。今日の山崎先生のお話をうかがって、たくさんのヒントをもらった気がします。まずは、近所の公園を使って地域みんなで楽しめるイベントを仕掛けてみたいと思えます。

私は来年、建て替えが行われる浜見平団地の再開発において、建て替え中の隣近所のコミュニティをどう再編していくかという研究を引き継ぐことになりました。今回の講義で子供がどうしたら集まって楽しめるのかというきっかけづくりの参考になりました。そこに老人をはじめとした地域の人々の携わり方も参考に、また、人への伝え方(プレゼンテーション?)も自分が今後、人にもものを伝えるときに学ぶべきところがありました。今回は本当にありがとうございました。

子供の主体的な関わりを作り出すしかけをどのように作っていくかは、実際にはすごく難しいことが多いのだらうと思えました。山崎さんのお話は、どれもとても面白く魅力的で楽しい講義でした。ハードとソフトとそれを組み合わせるデザイン的な思考力、やはりなかなか難しいとは思いますが、社会的課題を解決するためにデザインがあるというのは、はっとさせられたしその通りだなと思います。今後も受講者の方々と意見交換の場があると良いと思えました。

大学、行政、地域が一体となってまちづくりを行っている柏の葉は、とても勉強になります。アーバンデザインセンターの存在の重要性にも共感できます。山崎先生の書籍は読ませていただき、かなりの影響を受けました。今現在、横浜の団地再生・活性化PJに参加をしており、その中でそのやり方等も取り入れさせていただこうと思います。ありがとうございました。

まちづくりについての考えがもっと広がったような気がします。特に今回は「子供のまちづくり」がテーマで、山崎さんの子供たちが自分たち自身で遊び場を作っていくという考えがすごく新鮮でした。これからも楽しみにしています。

本を読んだだけではわからない細かい部分もわかって大変参考になりました。ありがとうございました。参加された方と意見交換できたことでたくさんの方とご縁ができてとても良かったです。今後も勉強させていただきます。

こどもの視点からコミュニティの活性化につなげる大切なヒントをお聞きすることができ、ありがたく思いました。住まい手同士が関係性を持ち続ける為にも仕掛け(ソフト)の重要性を認識しました。アイデアを出してみたいと思えました。

憧れの山崎先生のお話を聞けてうれしいです。自分の立ち位置を模索していたので、デザインのことを勉強しながら、私らしく地域に入っていけたらと思います。大変勉強になりました。ありがとうございました。

お話全部が興味深かったです。まちづくりに関して勉強していかねばいけない課題をたくさん見つけました。ありがとうございました。

魅きつけられるトークで時間があっという間でした。「こども」を豊かに育て、そしてそれが街の活性化につながるの理想です。そのノウハウや成功例が聞けて良かったです。

山崎さんの講義は数回行かせてもらっているが、今回の講義が今までで一番面白く、とても興味深い内容でした。元設計でバリバリやっていた山崎さんが今のような箱とマネジメント両方必要というような考えに変わっていった出来事をもう少し詳しく聞きたかった。

新しい切り口の講義で面白かった。建築を学んできた私にとってデザインの意味が色々あり、出来ることも色々あることが理解できて面白い。

今、建築を勉強していてやはり、ハード面についていといと考える学ぶ機会はあるんですが、やはりソフト面を学ぶことが少ないので非常に刺激を受けました。ドラえもんの話の原っぱの話であったように、今と昔の時代背景が違うなかでの解法としてのソフト面は非常にもしろく聞かせていただきました。公園で行われるさまざまなイベントはまさにゲームのようです。

テーブルごとのディスカッションタイプを臨機応変にやられるところが素晴らしいです。ソフトの話が中心になるかと思いきや、「デザイン」が本来担うべき役割について、特にハード整備の可能性について話されていたことが嬉しいです。山崎さんは「心に響く」話ができる方なのだなあ、と実感しました。これが大切ですね。「つくってもいい/つくらなくてもいい」という価値観を多くの人が共有できる街になるといいです。この柏という街も。「親はあっても子は育つ」夫婦感で共感するのが最大のテーマかもしれません。

私は「子どもの居場所」について研究を行っているので、パークマネジメントなど、さまざまなことが勉強になりました。私自身も「子どもの居場所」は子ども自ら作り、遊ぶことが大切だと思っていました。昔のように、空き地や小さな空間を子どもが見つけ、遊びをつくっていく方法はないかと考えていましたが、山崎先生のお話にもありましたように、現代の社会環境(パソコン、ゲームなど)をふまえた上でマネジメントしていくことも大切なのだと思えました。最後のグループワークショップは柏の行政の方や、様々な方とお話ができ、良かったです。ありがとうございました。

大変、参考になることが多かった。山崎さんのお話し方はとてもわかりやすく、情報が詰まっているなと感心してしまっただけでなく、きつと様々な苦労があってあの明るさでプロジェクトを完成されていくのだらうと思えた。デザインを勉強することの重要さがわかった。

大変参考になりました。今の子供達にあるつながりを無理矢理おしつけるような考えでしたので、子供のクリエイティビティを育む考えにしていきたいと思えました。次回からもよろしくお願ひします。



まちでの“遊び”と“体験”で育まれる子どもの心とからだ

10/29

講師：吉永 真理 氏
(昭和薬科大学教授:臨床心理学)

Schedule 10:00 講師の紹介
10:05 講義
11:15 質疑応答

Staff スクール担当ディレクター 岡本
スクールスタッフ 石黒、鳴浜、山崎、深町

Lecture

■■■ 議事 ■■■

0. 略歴紹介

・保健学や臨床心理学を基盤に、子どもの体験や参画を通じた意欲、自己効力感の向上を目指して活動中。
・所属する昭和薬科大学では、講義や研究以外にも、臨床心理士の資格を生かして、学生の悩み相談などカウンセリングも行う。

1. 子どもが育つ遊び場環境

【自分自身の「子どもの頃の住んでいたまち、遊び場」は?】 ※簡単な個人作業+グループ討論

・自分自身の子どもの頃住んでいたまち、好きだった遊び場とそこでの遊びを、予め配布した白紙に記入(文章or絵)。

⇒「今の子ども達はその遊びをできるか」など、4つのグループに分かれて相互に気づいたことを話し合った。

…「かつては何も無い原っぱ等で自由に遊んでいた。後に公園に遊具が置かれるようになり、最近は野球・サッカーのクラブチームなど組織化」、「今の子どもは定められた場所でしか遊べない」、「入ってはいけない場所が増えている」などの意見が出た。

【遊び場環境の変化と遊びの実態】

・遊びと遊び場に関するアンケート調査…

⇒「遊び」…ほとんどの調査で「ゲーム」が1位。他に上位は鬼ごっこ、サッカー・野球、ドッジボールなど

⇒「遊び場」…自宅・友人宅、公園、学校の3つがベスト3。 ⇒4位以下に地域の特色が出るか。

・地域特性による「空間」「遊び」の実態調査…各小学校の児童の遊び場の傾向を見る。

⇒「観光客が多い商店街」と「古い街並みが残る住宅街」の比較(沖縄県)…前者では他に遊び場が無く、児童館が多かった。後者は公民館が多かった。昔ながらのつながりが残っており、祭りの準備などで地域の大人も公民館によく集っているため。

⇒「駅そばの市街地」と「閑静な住宅街」の比較(町田市)…前者では、学校で遊ぶように指導していることもあり、学校の頻度が高い。後者では、「道」で遊んでいるケースが多い。

⇒東京都心…遊び場の1位は「学校」 ※今の子ども達は「学校」で遊ぶように誘導されているケースが多い。

・まちが異なると遊びも異なる。心理学用語「アフォーダンスaffordance(J.Gibson)」で考える事ができる。

※アフォーダンス…環境が人にとっての意味・可能性。日本語では「環境の(知覚される)資質」と訳されている。

・K.Lynchの調査では、大人に昔を思い出してもらったときの「思い出の要素」として、地面の表面、壁の素材、樹木の葉陰などが共通要素として挙げられた。子どもはそうした空想を育む、隠れ家的な、自然体験につながるような空間で遊ぶことが好まれ、印象に残る。

【4世代遊び場マップの作成～子どもにとってのアフォーダンスの変化を探る】

・1980年代に世田谷区太子堂地域で「三世代遊び場マップ」が作られた。その後全国各地で作られるようになった。

⇒それぞれの時代にどんな遊びがされたか、住民にインタビューして地図上に情報を落とし込んでいく。

※参考資料『三世代遊び場図鑑』(1999)…昭和初期、30年代、50年代の“3世代”。まち、遊び、遊び場の変化がよくわかる。

・“4世代目”をつくるために「遊びとまち研究会」を結成し活動。池尻児童館を拠点に、太子堂、三宿、池尻地域の子どもの遊びや遊び場を調査し、4世代目のマップを完成。

⇒子ども達はアフォーダンスが変わっても工夫して遊んでいる様子がわかる。DS通信機能を使った「DS鬼ごっこ」もその一例。

【「まちでの遊び」の効果】

・「遊び」そのものは、心理学や健康科学の分野においては重要なものとされている。

…発達障害のある子どもへのセンサー・ダイエットの視点に基づくアプローチ。「じゃれつき遊び」の効果に関する研究。など

・「まちでの遊び」の効果を実証するための研究…進行中

⇒(アンケート調査)まちで遊んでいる子のほうが「人と話したくない」などの数値が低い。

⇒授業中の意欲との関係を見ると、「生活体験(お手伝い等)」は正の相関を示すが、「まちでの体験」は相関を示さなかった。

⇒ちびっこプロジェクト…まち遊びや自然遊びが子ども達の発達にどのように作用していくか、3カ年計画で調査研究中。

プレイリーダーの指導による感覚遊びの前後で子どもの変化を調査(go/no-go調査)。

・4～5歳は心理学上は大事な時期と言われている。共感する心が育ち、自分以外の立場から考える力、自我が芽生えてくる。

⇒「発達の凸凹」がはっきりしてくる時期で、感覚・認知に働きかける「遊び」など、凸凹に応じてアプローチすることが重要。

2. 子どもの「目線」

・「Bubble-Wrapped Kids」(K.Malone)…子どもがつらい目に合わないよう、大人が子どもの周りに過剰に“包装材”を巻いている様。

・「Children’s Independent Mobility」(M.Hillman)…子どもの移動自由性。年々下がっているが、日本は欧米に比べてもまだ高い。

⇒どこに行くにも車ばかりでは、子どもが見る風景は狭い車窓を通してのみ。道を自由に歩き回れることが大切ではないか。

・日本では「子どもが何も出来ない」と考えるは親は少ないが、近年「自由に外出させること」に不安を抱く親は増えている。パブルラップ増の兆候?

・CIMが低くなることの問題…地域の空間認知に影響。他にも、肥満や心の発達にも関係。

⇒まちのアフォーダンスと親の考え方を変えていく必要がある。親の安心→まちの安心・安全→子どもの目線

・ドイツの事例…子どもの目線を大人が実感できるよう、子どもの目線からまちを見るためのツール。

・「参画のはしご」(R.Hart)…形式的な参加ではなく、子どもが主体性をもって計画段階からまちづくりに参画させることが重要。

・「Growing Up In Cities」…子どもや若者が街のどこを変えていったらよいか、具体的に行政に提案する活動。世界各地で実践。

⇒(事例)世田谷区の公園…計画段階から子供が参画し、子ども達のデザインによる遊具などが置かれた。

⇒(事例)バンクーバー…市民の計画する事業に助成する自治体のミニファンドで、子ども達と一緒に活動を行うイベントやハーブ園の造成プロジェクト等によって、荒廃していた地域が変わる結果となった。

⇒(事例)千葉市…市長と子ども達が直に対面したり、様々な部署で職場体験してもらう企画を実施。

※千葉市では、横断的に子ども・若者を支援する部署として「こども未来局」を2011年につくった。

・「Child Friendly Cities」…「子どもにやさしいまちはすべての人にやさしい」というスローガンのもと、ユニセフで1996年に開始。

⇒「子どもにやさしい都市(まち)」という宣言。全世界で900くらいの都市が加わっている。

⇒アジア太平洋ネットワーク(CFCAP)には、日本でもニセコ、千葉、さいたま、和光、多治見、近江八幡、広島が参加。

3. まとめ

・子ども達は「遊び」によって育てられる。そのためには「まち」を変える必要がある。子どもも参画させながら変えなければならない。

・まだ大人は子ども達を自分たちと同等のパートナーに思っていない。子どもたちのレジリエンス(Resilience)を感じて欲しい。

・「子どもは変革者である」…こどもの治療にあたっていた心理学者:河合隼雄の言葉。

・「子供たちこそ明日の日本の建築者」…戦中戦後の都市計画家:石川栄耀の言葉。(中学校副読本『私達の都市計画の話』より)

■■■ 感想・質疑 ■■■

・大人が子どもから学ぶという視点の大切さを痛感。

・大人が子どもの「遊び」を考えなければならない時代は悲しい。

・千葉市の「きぼーる」の子ども交流館では、市長との意見交換とのなかで出た子どもの意見により、子どもの遊び方のきまりを変える動きになった。

・子どもから年配者まで気軽に集える「カフェ」の良さ。 などの話題が挙げられた。



子供達こそ明日の日本の建築者。まさにそのとおり、遊びの中から、こどもの街、社会への参画、子どもの優しい街、子どもの参画。子どもから親が学び、こどもに教えていくこと。遊びにしても、子供達自身が考え、子ども自身が安心、安全を身をもって体験する、思いも寄らない遊びを見いだせる。

自分が子供の頃の遊びと今の子供達の遊びを比べて見ることが出来たのは良かったです。でも「昔はよかった」ということで済ませていけないのだと思いました。自分はどのように育ってしまったのか。自分の親はどのように我々を育ててきたのか。自分は自分の子供をどのように育てていくつもりで居るのか。というのを吉永先生の話聞いた後で受講した我々が考え続けることが大切なのだと思います。ありがとうございました。

貴重なお話ありがとうございます。講義の前半のところ、自分が昔住んでいたまちのことを思い出せる機会があって、久々にあったかい気持ちになりました。自分が子どもの頃を思い出しながら、今の子どもに自分が出来ることを考えたいと思いました。

自分が子供の頃に楽しかった遊び(レンゲ摘みなど)が、子供たちができない環境になっているのを寂しいと思っていましたが「四世代遊び場」マップのお話を聞いて、どの時代でも子供たちは状況に応じて遊んでいるんだと実感しました。子供目線やプレイヤーの必要性も改めて実感しました。

大変面白いお話をありがとうございました。私は大学院で「子どもの育つコミュニティ」について研究していますが、お話の中には出てきませんでしたが、「子どものたまり場」のようなものの重要性について考えます。「駄菓子屋」をまた再構築するには、というようなことです。本来、自然にあったものを人工的に再生する時代になったのだなと感じました。色々と考えさせられました。

「DSおにごっこ」時代を象徴していますね。DSも大人の都合で作られたものですが、各世代でも、大人が作った寺、神社、ベーゴマですのでその時々での変化も必然と考えます。ただ押し付けから、自発、子ども発信という考えはあらゆる分野で必要なことなのだと感じました。本日はありがとうございました。

こどもの移動自由性、この話は非常に興味深かったです。私は田舎に育ったので、遊び場の制限なくのびのびと遊んだ思い出があります。しかしいま都市部に住み自分の子どもの遊び環境を思うと、遊びの制限、親の視線など、子どもの自由性を制限することが非常に多くあります。親として大人として子どもの自由な発想を広げる場を考えてあげたいと思いました。本日はありがとうございました。

子供達の遊び、それも「まち遊び」成長の過程で重要なファクタであることを知ることが出来ました。「安全で安心なまちづくり」は現代の親にとって子どもに「移動自由性」を持たせるためにも、さらに自然とふれあえる環境が必要不可欠なんだなと実感しました。そして仕掛け作りが重要だなと思った次第です。

子どもの健やかな成長には、まち遊びが大切であるということを感じました。最近、地域が子どもたちを育てるということについてよく考えます。昔は、近所の大人によくしかられていたことを思い出します。今では、そんなことをするとその子どもの親が怒鳴りこんでくることもあると聞きます。なんとなく、大人が大人になれていないのではないかと感じることもあります。今日は、参考になるお話をありがとうございました。

子供から大人(私)が何を学べるかに気づき、感謝します。子供たちからの発想を活かした公園づくりや行政の職場体験をすることで、行政の方も気づくことが出来るのではないのでしょうか。これを「こどもサミット」で発表するなんて…。是非、子供たちと一緒に参画できるまちづくりを実現したいと思います。

子供の遊びマップで、四世代の調査内容はとても興味深かったです。昔の遊びについては、資料などで知っていましたが、現代の子どもの遊びについては、少し衝撃的な内容もありましたが、現代ならではの遊びで面白いなと思いました。ゲーム機を持ちながらも、子どもは体をつかって遊びたいのだなということも思いました。子どもの参画は保護者との関係もあり、難しい部分もありますが、今の時代だからこそ、大切にしていかなければならないのだと思いました。ありがとうございました。

まちづくりの要素としてその街に住む人、街で暮らす人、街を使う人が自分の目線で参加しながら街を作っていくことが大切だと感じました。今回は子どもがテーマですがこれは子どもだけでなく、全世代を対象に大切だと感じ、生活や仕事に活かしていきたいと思います。

子供は地域のアフォーダンスが変わっても工夫して遊んでいるというお話がとても印象に残りました。子どもたちが地域の大人や小さな子のことも考えて公園づくりを行った参画の事例のお話なども含めて、大人は子供が秘めているものを信頼して、まちづくりと一緒に、もしかしたら教えられながら行っていくことが大切なことだと感じました。本日はありがとうございました。

柏の葉は、三井不動産や東京大学などが提供してくれるイベントに「参加」することは多いが、市民や子供が考えて意見や提案を出来ることが少ないと思われる。それぞれの企業や組織がやりたい事をバラバラにイベントするのではなく、例えば子供の住みやすい街としてどんな街であって欲しいかという目線で子供や市民が提案・実施して「参画」できる「まちづくり」が出来ればと思う。

大変わかり易く大事なことをデータを用いて、教えて頂いて素晴らしい講義でした。有難うございました。



柏市における学校と地域の連携の現状

11/12

講師：松田 朋春 氏（スパイラル/ワコールアートセンター チーフプランナー）
芳賀 修一 氏（柏市教育委員会 学校教育課学校企画室）
須藤 勝己 氏（同上）

Schedule 10:00 講師の紹介
10:05 講義
11:15 質疑応答

Staff スクール担当ディレクター 岡本
スクールスタッフ 石黒、鳴浜、山崎、深町

Lecture

■■■ 議事1 ■■■ 「まちとアート / 五感の学校～ピノキオプロジェクトの取り組み」

1. 五感の学校プロジェクト

・街そのものを学びの場としてとらえ、アートを通じて自由で、美しく、気づきに満ちたまちをめざす。
⇒新線新駅での新しいまちづくり。「まちのソフト創り」のモデル開発。地域交流の仕掛けを予め準備。
市街地整備につきもののアートを見直す。比較的長期のプログラム。

・プロジェクトの対象…①隣人、②子ども(未来の担い手)、③ステーキホルダー(街を形成する関係者)
・プロジェクトの構成…ソフト(活動)+ハード(作品)+エンジン(担い手)
・プロジェクトの方法論…①公共空間利用、②共有化(経験・道具・ルールなど)、③力量形成(可能性の拡大)
・主なプロジェクト:「未来観測」…光による演出。新しいまち、人の気配、未来への予感を感じる。

「柏の葉総天然色」…土地の記憶(まちの風景と家族)を壁面に投影。身近なアート、隣人としてのアート。
「Summer Night Picnic」…バルーンと光の演出。新旧住民の融合、やさしい対話を表現。
「柏の葉キャンパスシティ二番街」におけるアート作品の埋め込み…街そのものが気づきの場。
「柏の葉はちみつクラブ」…彫刻作品において養蜂を行う。
「ピクニックエキスポ」…新しい街の社交スタイルとしてのピクニック企画。
「マルシェ・コロール」…月1回の定例交流市イベント。まちの魅力、「エンジン」が集合。
「はっばっば体操」…大学研究者とアーティストのコラボ。脳と体の健康をつくる、街のオリジナル体操。



松田朋春氏

2. ピノキオプロジェクト

・「子どもは街で育てよう!」をコンセプトに、将来の街の担い手(=子ども)が、街全体を巻き込み活動するプログラム。
⇒地域の子どもたちが主役となって活躍する参加型のアートイベントとして、「地域交流」と「体験による気づき」が促され、まちづくりに参加していく意志と創造性を養うためのプログラム。2007年度より継続的に運営・実施。
・ピノキオプロジェクトの構成: ピノキオ仕事体験プログラム…ららぽーと、マルシェ、ピノキオ食堂など、街なかにおける仕事体験。
ピノキオシティブプログラム…ピノキオ運営本部、子どものための自由な遊び場広場
出張ピノキオプログラム…国立がんセンター出店(花屋)、新・港村(横浜アートトリエンナーレ)への出張。
・まちの人々との協力…参加店舗や店員、保護者、ボランティアサポートも試行錯誤しながら準備、運営。

■■■ 議事2 ■■■ 「柏市における学校と地域の連携の現状」

1. 柏市の市立小中学校 (H23年5月データ)

・小学校=41校、770学級。児童数21,940人。教員数1,049人。中学校=20校、307学級。生徒数9,792人。教員数570人。

※学校支援ボランティア(H22年度延人数)…小学校5,225人、中学校670人

2. 柏市学校支援地域本部事業の実施

・平成20～22年度に、市内4中学校区でモデル事業を実施。各校区に地区教育協議会を立ち上げる。
⇒目的…学校・家庭・地域が一体となって地域ぐるみで子どもを育てる体制づくり
①教員・大人が子どもと向き合う時間を充実させる。
②地域住民が自らの学習成果を活かす場を広げる。
③地域教育力を活性化させる。

・柏中学区(柏中・柏一小・旭東小)…①図書ボランティア、②落ち葉拾い、草取り、③授業支援

・柏四中校区(柏四中・柏八小・名戸ヶ谷小)…環境整備ボランティアと介護予防事業のコラボレーション

・逆井中校区(逆井中・藤心小・逆井小・増尾西小・土南部小)…既存組織を活かした事業展開、地域活動、学校環境整備、図書ボランティア

・高柳中校区(高柳中・高柳小・高柳西小)…既存組織を活かした事業展開、地域活動(ピカ美化運動。TCN高柳コミュニティネットワーク)



須藤勝己氏

■■■ 議事3 ■■■ 「柏市立柏の葉小学校の概要」

1. 新設小学校ができる背景

・人口増…柏の葉キャンパス駅付近の整備に伴い、人口増が予想される。
・建設計画…区画整理区域内の小学校建設計画。
・既存校の対応限界…既存の学区(田中小、松葉一小)の教室数では、児童数増加に対応できない。

2. 新設小学校の概要

・地域にやさしい…子供たちを育て、守る環境。地域のシンボル。地域や世代間の交流。
・地球にやさしい…CO2削減、エコスクールの実現。
・子ども達にやさしい…屋上・壁面緑化、自然採光・換気、グラウンドの芝生化、バリアフリー、天然木材等の使用、有害物質の低減。

3. 柏の葉小学校の教育目標

・生きる力を育み、夢の実現に向けて未来を拓く子を育成する～確かな学力、豊かな心、健やかな体を持つ子を育む安全な学校
・めざす学校像…[か]通いたくなる学校、[し]信頼できる学校、[わ]わかる授業で楽しい学校、[の]能力が発揮できる学校、[は]発展する学校
・具体的なコンセプト…

- ①子どもが確かな学力・豊かな心・健やかな体を持つ学校…外国語教育、国際理解教育、大学等との連携による科学教育 など
- ②子どもの満足度が高い学校…子どもの生命・安全を守る、中学校との連携、働く意識や勤労観を体験的に学ぶ など
- ③教職員が協働する学校…研修による指導力向上、子どもと接する時間を多くとる、個人が強みを発揮できる組織づくり など
- ④地域や保護者の信頼度が高い学校…地域に根差した教育、保護者と共に共育する、保護者や地域の方の教育参画 など

4. 開かれた学校、信頼のある学校を目指して

・開校準備委員会のもと4部会で検討を進めている…施設・備品・教材部会、教育課程部会、学校地域連携部会、庶務部会



芳賀修一氏

■■■ 質疑・応答 ■■■

【質問】柏の葉小学校は「開かれた学校」として住民など様々な人の意見を聴く機会を持って欲しい。

⇒柏の葉エリアの小学校として特徴をもたせたい一方で、公立学校として文部科学省の学習指導要領に沿う必要もある。学校運営を軌道にのせるには2年かかるだろう。地域の意見を聞く機会を設けながら、学校・家庭・地域の連携をつくっていきたい。

【質問】柏市学校支援地域本部事業の事業対象外だった地区で「地区教育協議会」を立ち上げるにはどういった手続きが必要か？

⇒決まった手続き方法がある訳ではない。地区の事情に応じて、PTA・子供会など発信しやすいルートから進めて良い。

【質問】世間の中高一貫の潮流のなか、敢えて小中連携をコンセプトに掲げる意図は？

⇒生活や学習の急激な変化による「中1ギャップ」の克服を意図している。連携の方法は様々あるだろうが、柏の葉小の前の敷地に中学校が新設されるまでは既存中学校に分散して進学するので、その条件における連携を考えなければならない。

【質問】「学童保育所(こどもルーム)」と「放課後子ども教室」の関係は？

⇒併設されているケースがあっても、子どもを預かる「こどもルーム」と学習活動や地域住民との交流活動を行う「放課後子ども教室」とは目的が異なり、管轄部署も異なる。

理想に向けた柏の葉小学校では、「地域との連携」が言葉だけにならず、子供たちの未来に向けて考えられる人材の育成と選び方を考えてもらいたい。柏の葉小学校は、アート部門でのプロの力も入れてほしかったと今日の講義で更に認識させられました。

地域の活性化に学校の果たす役割の重要性を改めて感じました。それぞれの立場で有効的に発信、共同してより良いまちづくりに活用して欲しいと思いました。

ピノキオプロジェクトについては、柏の葉に住みたくするような魅力的な取り組みで、子供にとっても身近にさまざまな経験をできる機会やプログラムがあるのは素晴らしいと思いました。

柏の葉小学校・中学校のデザイン、そしてその学校と地域の連携のシステムが解り、良かったです。前回の講習と今回の内容を照らし合わせ、地域の方と子供たち新しく建てられる学校とカリキュラム内容も子供たちのアイデアが活用されたら良いのでは、と考えました。

仕事柄(建築関係)、学校教育のことや教育委員会の話を聞く機会があまりないので良かったです。

貴重なお話有り難うございました。柏市でのいろいろなアートプロジェクトのことを分かり、過ごく有意義でした。特にピノキオプロジェクトには是非参加できればと思いました。あと、仕事体験というプロジェクトは自分が子供の頃にも少し体験したことがあり、子供にとって非常に良い機会だと思います。子供の頃から自分の適性や興味のある分野の発見は先のためにも必要なことで、それに繋がるきっかけとなると思います。また新しくできる柏市立柏の葉小学校の基本となっている考え方街の中の学校というコンセプトが面白かったです。ぜひそのような理想的な学校が出来上がることを心から望みます。

地域活動を活発にしていく、継続していく時に子供の活動を中心に考えることで、地域が活性化するという視点は、非常に大切だと常々思っています。ピノキオプロジェクトを見守りたいと思っています。

スパイラルさんのアート活動の数々はとても素晴らしいと思います。今後、三井不動産のバックアップがなくなった後も永続的に活動が続いていくことを期待しています。柏市の新設小学校開校に際して、多数の声があったにも関わらず「住民がいない」という決まり文句で意見を聞かない姿勢はやはりお役所縦割り仕事で非常に残念に思いました。

スパイラル松田氏の取り組みに色々な可能性を感じました。子供を中心とした人集め、コミュニティづくりに共感できます。子供を育てるというミッションにアートを融合させることは、私自身も取り組みたいことでした。

地域サイドの立場から「学校と連携するにはどうしたら良いのか？」という疑問を持って本日に臨みました。モデルとして形が出来ている地域では成果が出ている様ですが、まだ事業化されていない地域については地域サイドから手を上げないと形が出来ていかないのかなあと感じました。地域から声が上がった際には学校も前向きに対応していただけると有り難いです。

地域と学校の連携の具体例をもう少し多くお聞きできればうれしかったです。地域に関わるように準備されている柏の葉小学校のコンセプトは素晴らしいと思いました。質問にも出ていたように、地域の方からは(保護者ですら)学校というのは敷居が高いので、柏の葉小学校がモデルになり、柏市内の全体の学校がより開かれていくことを願っています。

内容の異なる話を一度に聞けて参考になりました。ただ、「地域～学校～民間」というつながりがなかなか見えてこなかったのが残念でした。

五感の学校、新設の小学校のお話から本当に子供の教育に必要なものは何か？単に知識、学習を読み込む教育から地域とのつながり、人とのつながりを通じた人間力の育成へと変化している様子がうかがえます。我々はまちづくりを業としています。その中でも地域のつながりの仕組みや交流のプログラムなどをぜひ取り入れていきたいと思います。本日は有難うございました。

とても良い講義を聞きました。ピノキオプロジェクトの取り組みを聞いて、うれしく思いました。柏の葉小学校のことも安心して子どもを新小学校に行かせることが出来る気がします、ありがとうございました。

五感の学校プロジェクトとして、生活とアートやマルシェコロールなど地域ぐるみで活動しており、良い環境だなと思いました。ピノキオプロジェクトに関しては子供に様々な体験をさせることは良い面もありますが、仕事の体験などは中学・高校でもできるのではないかと思います。子供の時期は自然体験など体を動かし、子供ならではの体験がさらに必要だと思います。柏の葉小学校については、小学生にとって中学生は怖い存在であると思うので、中学校との連携を取る上で色々考えていかなければならないと思いました。

松田さんから教わることは街は素敵であることです。真面目、一生懸命、その上で「素敵」であることが大事ですね。「見たことのない風景」いい言葉です。学校支援ボランティア事業が成果を上げていることを知ることができてよかったです。支援ボランティアと地域の関係性が今後どうなっていくのだろうということが最も大事な課題なのだろうとも思いました。教育委員会の方々がUDCKの存在とその価値、意義をどのくらい理解させて、評価されているのだろうとも思いました。教育委員会はUDCKを活用しようと思っているのでしょうかとも思いました。本日の柏の葉小学校の話は大変興味深いものでした。以前、小学校の設計に携わることがあったので、現実の学校教育のあり方の変化に見える将来性を期待しています。



子どもの安全教育とまちづくり

11/26

講師： 宮田 美恵子 氏
(日本こどもの安全教育総合研究所 理事長)

Schedule 10:00 講師の紹介
10:05 講義
11:20 質疑応答
11:30 修了式
12:00 懇親会

Staff スクール担当ディレクター 岡本
スクールスタッフ 石黒、嶋浜、山崎、山下、深町

Lecture

■■■ 議事 ■■■

- ・「子ども」と言っても対象とする年齢には幅がある。本日の講義は主に「小学生」に焦点を当てている。
- ・子どもをとりまく危機にも、地震・放射能など様々あるが、本日の講義は「犯罪」が中心となる。

1. 子どもの安全と地域防犯の関わり ～大阪教育大学附属池田小学校の事例から～

- ・子どもは多くの時間を学校で過ごすことから、学校内への侵入と通学路で発生する犯罪を考える。
- ・附属池田小事件(2001年6月8日)では、なぜ附属小学校が狙われたのか？
⇒ごく普通の街、生活環境に立地してても、“特別なエリート校”として、遠方からも子どもがバス・電車で通う、地域の見守りの目を得にくい学校。物理的にも人的にも“隙”があった。



宮田美恵子先生

- ・事件後、学校の周囲に高い塀が設けられ、複数あった入口も1つにされた。社会を震撼させた大事件後であり、物理的な対策が進むのは仕方が無い側面はあるが、そもそも“地域から浮き上がった存在”がさらに孤立化した。地域と学校が手を結ぶ工夫が欠かせない。
- ・「開かれた学校」では、動線や場所・時間帯の管理(すみ分け)が重要である。物理的に閉じる部分、学校と地域とが手を取り合う部分など、物的・人的な環境を整えることが必要。

2. 小・中学生の被害実態とその特徴 ～緊急時行動特性全国調査(2009年10月～2010年1月)より～

- ・子ども達に被害体験の有無を質問。 ※調査対象…全国8ブロック、公立小2・4・6年生(計710人)、公立中1・3年生(計480人)
※被害体験…[危険度1]凝視、[2]声掛け、[3]つきまとい・身体露出・接触など、[4]車への連れ込み・強盗。
- ・小学生は被害体験有15.1%(性差・学年差ほとんどない)。中学生は被害体験有8.3%(性差がみられる)。小中とも地域差はない。
- ・被害にあう空間…通学路やその他道路が多い。通学路で50%以上の被害。

3. “危険な場所”とはどこか？ ～子どもはどこで被害に遭っているのか～

- ・【写真例示】どこにでもあるような、普通の生活空間が実際の犯行現場になっている。
- ・同じ時間・空間において①犯意ある行為者、②相応しいターゲット(力弱い子どもなど)、③監視不在(パトロールの目や監視カメラの不在)が揃うと、犯罪はいつでもどこでも起こりえる。つまり、危険な場所はないが、危険な状況はどこでも起こりえる。
⇒「防犯まちづくり」とは、犯意ある者を入りにくくし、力弱い子どもには安全教育をし、監視する者を増やすことだと言える。

4. 犯罪特性と犯罪者行動生態・心理

- ・犯罪対策の考え方は、かつては、犯罪を起こす者自身に問題があるという「犯罪原因論」に基づいて犯罪者を逮捕(隔離)することに主眼が置かれていたが、今は、犯罪を起こすチャンスを奪うという考え方「犯罪機会論」に基づいて、“予防”に主眼が置かれている。

5. 防犯のまちづくり ～防犯環境設計(CPTED)の考え方～

- ・CPTED(Crime Prevention Through Environmental Design)…ものの形・配置を変えることで人の動きを自然にコントロール
⇒ポイント…①領域性の確保、②動線の制御、③監視性の確保 など

【市民が出来る防犯対策】

⇒ポイント…①(犯人が)近寄り難い、②(防犯の)意識が高い、③地域活動が活発、④格差がない

※割れ窓理論…小さな亀裂が大きなりリスクに拡がっていく。⇒小さな気配りが効果を発揮する。

- ・落書きやゴミ不法投棄…最初に落書き・不法投棄するには勇気が要る。落書きを消すなど対処し続けることが重要。
- ・防犯呼びかけの看板…倒れている看板を立てかけるだけで意味がある。「昨日とは違う」という状態が重要。
- ・町会の掲示板…情報の更新頻度が高いと、活動が活発な地区だと思わせることができ、犯罪予防になる。
- ・自動販売機(夜間照明)…周囲との明るさの格差を生み、暗闇へ犯罪を誘引する。明るさのバランスが重要。
※石川県金沢市の住宅街で行った社会実験…防犯灯を補完する外灯を沿道の家々に設け、照度のバランスを整えた。
※取手バス襲撃事件…事件1月前に駅前の大規模店舗が閉店し、人通り減少。他にも放置自転車の増加など、好ましくない雰囲気徐々に形成されていた。犯人は柏駅・守谷駅・取手駅を下見し、犯罪に相応しい場所として取手駅を選択した。

6. 安全教育とは何か

- ・犯意ある者が大人の行う対策(いくつものバリア)を越えて、子どもにアプローチした際には、子ども自身で対応しなくてはならない。
⇒「大人へのバトンタッチ」を身につける。
- ・緊急時の子どもの対応…「伝える」(叫ぶ・ブザー・拒否)、「求める」(逃げる・“子ども110番の家”に駆け込む・近くの人に助け)
⇒とっさの行動…「伝える」は子どもに難しい。走って逃げることはなんとかできる。
※犯罪被害に遭遇した際は「何も出来なかった」…小学生全体の20%、低学年女児では60%。
- ・子どもに身に付けたい力…危機を避けることが出来る力、人と手を組むことが出来る力
⇒危機離脱を支える力=心と体に力をつける。「心」=大切な人の存在、「体」=状況に対応できる身体能力。
- ・大人の役割…子どもの声を受け止められるまちづくり

7. 市民性を育む教育 ～自ら考え行動する～

- ・「犯罪に合わないこと」だけでなく、「市民性」を育むことが重要。
⇒市民性…「日々の暮らしを守るために何が出来るか」を自らに問いかけ行動できる。他人の安全のために人とつながれる。
- ・安全教育…(0歳から)自尊感情を育む、(5歳から)自ら行動を起こす、(12歳から)他人の安全も守る、(大人から)市民性を育む。

8. 安全体験学習の実際

- ・従来の座学中心のものとは異なり、知識だけでなく、実際に体を動かして危機にどう対処できるか体験的に学ぶプログラム。
⇒子どもの対応力を確かめる。対応できない子どもに対しては、大人がその手当てを考える必要がある。
- ・子どもの「不審者」を認知する力は極めて弱い。(ただし、大人でもほとんど割合は変わらないと思われる)
※「わからない」の割合…低学年:約76%、中学年:約55%、高学年:約50%、中学生:約40%
- ・危機を感じた対人距離についても、実際に「逃げるべき」と感じたのは2mくらい。このくらい近づかないと、自分に対して行為を及ぼそうとしているか否かも分からない。
⇒挨拶など、それぞれの行為に相応しい対人距離は、日々の生活の中で覚えさせる必要がある。

■■■ 質疑・応答 ■■■

【質問】「開かれた学校」をつくっていく上での示唆や、先行事例があれば教えていただきたい。

⇒附属池田小事件以降、小学校の物的環境の改善は進んできており、学校内に侵入する事件は減っているが、校門の外での事件がみられる。学校の安全と地域の安全をつなぐことが大事。金沢市には、地域パトロールの市民が学校内にも駐在して物的・人的に内外をつないでいる小学校がある。先生は不審者の対応だけでなく児童・生徒の対応もしなくてはならないため、先生の安心にもつながる。

【質問】侵入しにくい雰囲気をつくるため、教室の配置変え等を学校に提案しても、「防犯カメラがあるから大丈夫」という対応をされた。

⇒防犯カメラは侵入しようとする人には抑止にはなるが、その映像を常時チェックしている人はいるのか。先生の意識も変えていく必要があるだろう。

Ceremony 修了式

三牧浩也氏(柏の葉アーバンデザインセンター副センター長)より修了証授与



Voice

受講生からの声 - 授業を受けての感想を自由に書いてもらいました

子ども自身で危険を回避すること時は難しいことなのだと改めて知りました。子供を守る環境は周囲のコミュニティ(地域)の関わり方、大人自身が当たり前のルールを守り、それを伝えていくことが重要なのだと知ることが出来たので、行動・活動につなげていきたいと思います。

近年、子供中心の話題が多い時、1～4回タイムリーな講義だったと思います。ありがとうございました。

小学校の子を持つ親として大変勉強になりました。子供に危機を回避する力を押し付けるのはやはり大人の怠慢だと痛感しました。

お話を伺いながら「信頼社会か不信社会か」という議論を思いついていました。不信をベースにした町ぐるみの防犯、子供たちへの防犯教育の必要性というのが今の時代なのだなとは思いますが、信頼をベースにした防犯の仕組みはつくれないだろうかということを考えてしまいました。

防犯の為に、一人一人や地域でできる工夫をいろいろ紹介していただいて参考になりました。ありがとうございました。

今回の講義は大変参考になりました。自分が住まう地域の安心、安全のための具体的なアクションのヒントをたくさん得ることが出来ました。私一人が問題意識を持っていてもその思いに地域の中での温度差があっては安全性を高めることも限界があると思っています。同じコミュニティに暮らす人、その地域との関わりに対する格差があることも感じていますが、今日の講義内容を近所の父親たちと一杯やりながら話してみたいと思います。ありがとうございました。

防犯環境設計の原点(領域性、動線性、監視性)を振り返ることができ、まちづくりにおける忘れがちな部分を再発見しました。こどもの成長における、ハード・ソフトのプログラムがいかに重要か、市民性を育む場としてこれからもまちづくりに関わっていききたいと思います。

まず池田小学校の周りの環境が理解でき、町の中の一部でなければならないということがわかりました。地域との関わり方を大切にしなければならないと思います。まさに教育の場であるので地域の防犯と学校の安全教育が一致しなければこどもの安全は難しいと考えます。まず家庭から安全を教え、地域・学校での安全教育が必要だと思えます。

わかっていたようで見落としていたこと、考え方を講義を聞いて地域、町会などでもっと改善していただける所があると思いました。1時間半では足りなかったように思います。

子供が危険と感じ、あるいは実際に危険にあう場所は、日常の何気ない場所であり、危険な場所があるのではなく「危険な状況がある」のであり、その状況を作らないことが大切であるというお話が印象に残りました。また子供の安全教育が0歳から始まっていること、守られている安心感や自尊感情が子ども自身の安全を自分で守る力、そしてそれがやがて市民という街を守り次世代へとつながり、安全教育を考えることは「まちづくり」そのものだと思います。自分の街での子供たちの安全やまちづくりを改めて振り返ってみたいと思いました。本日はありがとうございました。

実際に事件が起こった現場の写真が特に印象に残りました。子どもが小学校に通っている時に殺害予告があり、地域ぐるみの防犯の大切さを身にしみているので、今日のお話をPTAや地域の方にお伝えしていきたいと思いました。

犯罪が起こる条件を完全になくすことは難しいと思われた。自分のエリアだけを守るのではその周りを見なくなってしまうことがありうることも理解することができた。犯罪を少なくするためにいくつものバリアを気づくことが大切だということや、安全に関する知識をみんなで作ることで、防犯の力を強くする事ができると思われた。

地域の安全を心理的な面で防犯ができるという事が実感できた講義でした。資金が充分あれば、物理的な防犯(カメラなど)が設置できますが、それだけでなく、地域の住民のつながりと地域の活発さがその安全環境をつくるのだと考えさせられました。

安全とまちづくりが密接につながっていることを再認識できました。危険なことを教える前に、安全・安心できるものを教えるのが大切だということが印象的でした。

私は建築学部でまちづくりを学んでいるのですが、防犯という視点からまちづくりを考えることがなかったので、とても面白く興味深く授業を受けました。

子供の安全教育という視点で「まちづくり」のことを考えていくきっかけがあまりなかったため、今日の講義は非常に刺激となりました。ありがとうございました。

大人にとっては危険に見えない場所が事件現場になっているということが写真を見てよくわかりました。犯罪発生については「危険な場所」はなく危険な状況は条件が揃えばいつでも起こりうるということが印象に残りました。犯罪発生者の3つの条件を揃えないためにも、ハード・ソフトの少しの工夫で、大きな防犯になるのだなと思いました。安全体験学習はとても良い取り組みだと思いました。どの学習に関しても、自ら体を動かして体験することであらゆる場面で役に立ち意識も高くなると思いました。

防犯のまちづくり、防犯環境設計の考え方は非常に参考になりました。私は住宅の街並づくりを行っていますが、住まう人の視線での防犯という考えから、死角作らないオープン外構を心掛け、夜間の防犯として灯りによる防犯、「灯りのいえなみ協定」に取り組んでいます。灯りの連続に関して、本日金沢の街の事例データから効果の高さを確認できました。今後も自信を持って取り組んでいきたいと思えます。本日はありがとうございました。

柏市の補導委員を10年やっていて街頭や地域、電車内などパトロールをしています。補導委員は150名いて、毎日自分たちの地域の見守りをしてはいますが、なにより子供たちの自尊感情を育てることが大切だと感じています。柏にはたくさんさんのパトロール隊、見守り隊があり良いことだと思っています。学校と地域との関わりは本当に大切だと思っています。今日はよいお話を聞くことができ、これからの指針にもなりました。ありがとうございました。学校の周辺の美化も大事ですね。

Party

懇親会

受講生・講師・運営スタッフを交えて、懇親会を行いました。

「授業の感想」を全員に発言いただきましたが、子どもを育むための環境づくり・まちづくりへの意識の高さが窺え、親睦を深めるとともに、今後の地域での取り組みに向け思いを新たにすることができました。

※UDCKまちづくりスクールは2012年度も引き続き開講を予定しています。皆さま是非ご参加ください!

